

吾妻町の文化財 7

弘法原遺跡

1983

長崎県吾妻町教育委員会

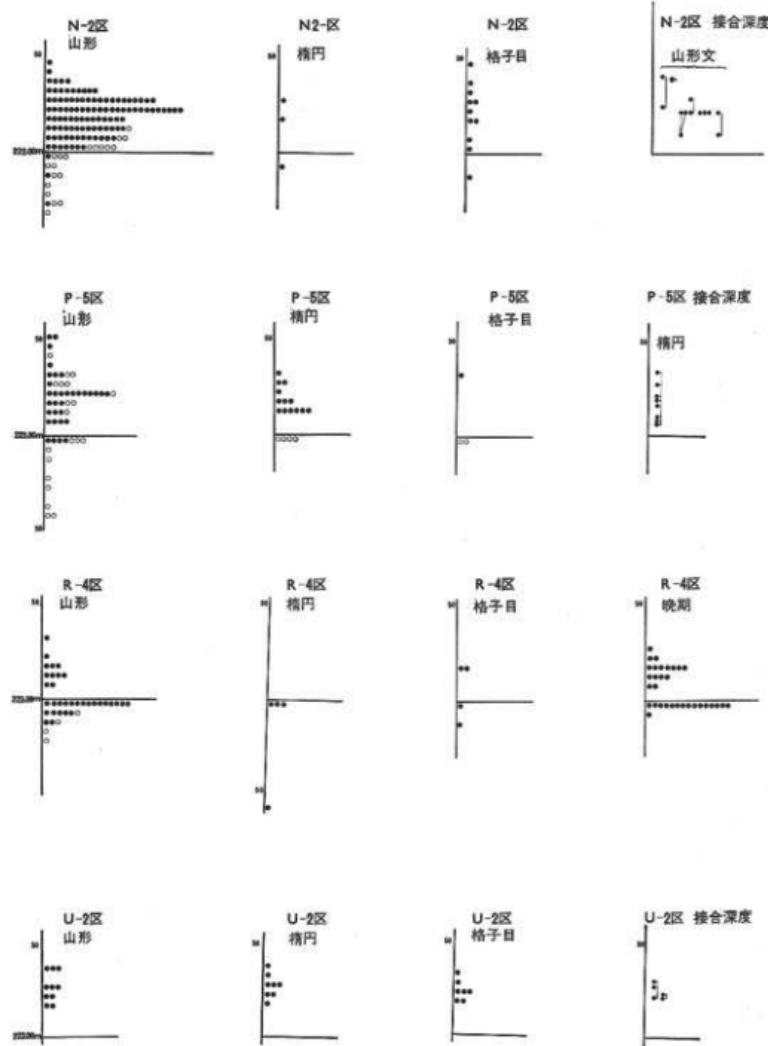


Fig. 10 土器出土深度

しⅢ層に沈降する現象があり、この時期における一つの傾向として捉えられるのであろう。もちろんこのような現象は同様な土層状態についてのみの結果であり、遺跡立地環境が異なれば（砂地・基盤岩の風化土・etc.）遺物自体の出土も変化を見せるであろう。

註1 第6回長崎旧石器研究会の際、古賀力氏の御教示を得た。

註2 地域振興整備公團・長崎県教育委員会 1981 「西輪久道遺跡・鹿野遺跡」

註3 長崎県教育委員会 1975 「諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 図録編」



調査前のお祓い

四 出土遺物

1. 土器

1次、2次の調査で出土した土器の総点数は6158点を数える。その内訳は Tab. 1～Tab. 3 のとおりであるが、この中には細片のあり、文様が識別困難な資料が2,422点ある。従って、明瞭に統計処理し得る数量は、残りの3,736点ということになる。表中記載した各種文様土器の占める割合は、それぞれ不明分を除外した3,736点に対する比率であることをあらかじめ断っておきたい。

出土土器は、まず時期的にみると早期と晩期の資料とに大別し得る。しかし、晩期土器の占める割合は、僅か3.4%であるから、ほぼ早期の単純遺跡と考えてさしつかえあるまい。

次に、早期資料では圧倒的に押型文土器が多く全体の85%を占め、以下無文土器8.7%、そして撚糸、縄文、条痕、沈線文等のその他の資料が2%強という比率である。つまり、本遺跡は縄文早期、しかも押型文土器の単純遺跡といった性格を持ったものと言えよう。

遺物の出土層位はⅡ層とⅢ層に限定され、Ⅳ層以下からは全く出土しない。この層間に於ける出土比は、Ⅱ層より約80%、Ⅲ層より約20%である。只、Ⅱ、Ⅲ層の各土壤中の花粉分析の結果では、多少の気候的な変動とそれに伴う時間差を感じられるのに比して、出土土器の間に基本的な差異は感じられず、更にⅡ、Ⅲ層中の土器に接合例がかなり認められる。何らかの自然要因による遺物の沈下の可能性も考える必要があろう。

出土した土器は、次のVI類に分類される。

I類：押型文土器、II類：無文土器、III類：撚糸・縄文土器、IV類：条痕文土器、V類：沈線文土器、VI類：その他晩期の土器である。

I類 押型土器

押型文土器は、文様別にみると、山形、楕円、格子目と大きく3種に分かれ全ての調査区から満遍なく出土する。以下その順にI-1山形文、I-2楕円文、I-3格子目文と細分して説明を加えた。なお、個々の土器の詳細については観察表を参照されたい。

I-1類 山形文 (Fig. 11～39, PL. 26～47)

2,725点出土しており、これは全押型文土器中86%を占める。その内訳は、口縁部447点(Ⅱ層339点、Ⅲ層108点)、胴部2,123点(Ⅱ層1,626点、Ⅲ層494点)、底辺部85点(Ⅱ層79点、Ⅲ層6点)、底部73点(Ⅱ層57点、Ⅲ層16点)である。ここでは、一応器形の判るものについてのみ下記基準で6種に細分する。

なお、ⅡAとはⅡ層出土のAタイプ、ⅡBとはⅡ層出土のBタイプのことである。

A 口縁から直線的に内傾しながら底部にいたるもの (Ⅱ A 1～74, Ⅲ A 125～149)

B 基本的にはAと同じだが、一度胴上半部でゆるやかに外部に張り出す。(Ⅱ B 75～85)

C 直口口縁で円筒形に近いもの (Ⅱ C 86～105, Ⅲ C 150～155)

Tab. 1 出土土器統計表④

調査区	山形	円	格子	目	無文	壺	水	各	瓶	沈	緑	塊	罐	その他・不明			分計		
														口	胴	底			
A	II	35	165	7	2	1	13	7	9	6	40	1	1	1		1	3113	2340	
	III	7	22			2		1	1		2	5				1	48	90	
B	II	17	73	6		3		7	10	1	2	23	2	1		4	1	161	1314
	III	2	6	1	1	2		1		3	6	2				1	27	53	
C	II	9	62	6	3	1	7	1	4	1	10	2	3			1	4197	3111	
	III	2	6														23	51	
D	II	22	160	6	4	5		7	18	1	2	9	26	1	6	1	2	144	12361
	III		6														6	14	
E	II	4	24	1				1	3		1	2						39	75
	III	2	17	2				1	1				1					4	20
F	II	7	21			1		1	2		1	2	2					33	72
	III	2	9					1		1	2							15	
G	II	13	26	6				5	1	1	2							12	78
	III	3	12	2														5	22
H	II	4	35		13			1	4		2	2		1				19	83
	III	2	8	1		1		1	2				2	1			7	23	
I	II	4	13	3					1		2							1	24
	III	1	1															1	3
J	II	7	14	1				1	10			1						11	45
	III	4	21					5									4	34	
K	II	2	5	1													3	11	
	III		1															1	
L	II	1	5					1	1								1	11	
	III	1																1	
M	II	2	15	1					1								4	25	
	III	3						1										4	
N	II	3	4					1	1								1	10	
	III	1															2	3	
O	II	4	21					4	1	9	1							22	62
	III	4								1								2	7
P	II	8	41	1	3	1		1	4	4	4	2		1		1	1	23	196
	III	5	21	1				1		1	1			1				25	98
Q	II	26						2	2	2	1			3				23	60
	III																		0
R	II	10	40	4	1	2		4	1		4			1				26	93
	III	15	33	3				1	4	1	2							35	114
S	II	11	29	3	2	1		1	2				1					13	161
	III	1	10		3	2		1	2		1	1	1					7	29
T	II	8						1										11	22
	III	1	15					2											14
U	II	13	95	3	2	4		3	3	1	2	4		3				58	129
	III	1						1										1	3
V	II	5	34	1	2	3	8		6		1	1				1	1	30	194
	III	1	3		1	5		1			2					1	1	3	17
W	II	8	32		6	1		2		1	5							129	87
	III	9	26		1	12		2	3		1	1						29	82
X	II	10	1	3	2			1										3	23
	III	2		3	2													1	6
Y	II	4	1															6	12
	III																	2	2

Tab. 2 出土土器統計表②

調査区	山形	桔門	桔子目	無文	撫糸	条痕	沈縞	晚期	その他・不明		分計
									口 制 面透 瓦	口 制 面透 瓦	
O II	2 15	2	4	2	1				1 1	5	55
7 III	4 11		2							6	21
P II	1 10		1	1	3					20	1 37
1 III										2	2
P II	6 20	1 1		2	1 1					28	56
2 III	1			1	1						3
P II	6 30		5	1	2					68	104
3 III	6		1	2	1					29	39
P II	1 36	1 4 2 3	1							35	103
4 III	2 17	2 1		1	1					35	58
P II	4 22	1 2 5 8		1	1					42	1 85
1 III	3 16	2 1 3		2	2					8	39
P II	6 28	1 1 1		2						18	57
6 III	3 7				2					5	17
Q II	1 21			1	1		2 1			13	1 41
1 III											0
Q II	9 22	2 2		1						30	46
2 III	2									3	5
Q II	4 8	1	2		1 1		5			2	46
3 III	2									1	3
Q II	9 60	2	1	2 1	2 6 1		1 2		1 15	90	202
4 III	2 4	1			1						1 1
Q II	16 45	4 1 1	1	2	2 2					22	99
5 III	32	1			2					5	40
Q II	7 36	2 2 3		2	1					28	2 83
6 III	3 21	1			2					2 6	35
R II	6 31	2		3	2		2			1	21
1 III											0
R II	2 30	1 2		1 3	1 7	1			1 1	35	85
2 III	6 14	1 1			1					15	38
R II	11 23	1	1	2	1 1		1			15	19
3 III	2 2			1	1		1				75
R II	7 25	1	6	1 2	2 3 1	1			6 27	1	2 79
4 III	1 4					1				5	11
R II	7 33	2 2		2	3 1	2			5	1 32	2 92
5 III	2 1									1	4
R II	6									2	10
6 III	4 11	1	1	1						1	38
S II	5 17	1	1	1			1	1		8	35
1 III											0
S II	6 39		1	2 5	1 2	1			1	37	95
2 III	3 14			1 3	1					10	1 33
S II	8 22	2 2	1	2	3 6					30	1 70
3 III	4 29			3	4	1				14	1 46
S II	4 25	2	1	3	2 1	1 1	1	1		36	76
4 III	3 19		2	1						17	42
S II	6 18	2	4	1 4	2 2					26	65
5 III	6			1	1		1			5	14
S II	6 15	2	1	1						4	29
6 III	1			1						3	5

Tab. 3 出土土器統計表(③)

調査区	山形	桔円	格子	口無文	捲糸・綱文	条痕	沈縁	晩期	その他・不明			合計	
									口網直切底	口網直切底	口網斜切底		
T II	3 17			1			1 1		4		1 1	1 31	34
T I	III												0
T II	2 12	1 1	1	2			1 7		3 4		25	54	
T I	III												0
T II	4 19	1	2	1	2		5		2 17	21	76		
T I	III												0
T II	1 10		1	1	1					9 1	10		
T I	III	2 7	2							9	26		
T II	2 5		1	1	1					1 4	15		
T I	III											0	
U II	2 1			1 1		6		3	7	22			
U I	III											0	
U II	12	1 2	6			1		7 1	7	35	62		
U I	III				2			1		1	4		
U II	14			1	1	2		1 26	1 45				
U I	III	1 11	1						1 9	22			
U II	1 9		2	1					6	19			
V II	8							2	3	13			
V I	III									0			
V II	3								12	15			
V I	III									0			
V II	8 1			1	2				6	18			
V I	III	1 12	2			1			6	24			
V II	2 7		1 1	1					14	25			
V I	III	2 9	1 1	1					2	16			
合 II	339 1626	79 37	26 110	9 3 47 16	8 9 50 165	8 28 3 16 1	0 8 46 1 0 0 14 1 0 19 100	1 1 17 1051	5 17	4356			
計 II	168 494	6 15	8 42	2 0 9 45	1 0 15 34 0 6 1 1 0 0 3 4 0 0 1 0 0 3 0 0	7 420	1 5 125						
	$\frac{3725}{3731} \times 100 = 73.0\%$	$\frac{194}{3731} \times 100 = 5.2\%$	$\frac{264}{3731} \times 100 = 7.1\%$	$\frac{326}{3731} \times 100 = 8.7\%$	$\frac{16}{3731} \times 100 = 0.4\%$	$\frac{62}{3731} \times 100 = 1.7\%$	$\frac{16}{3731} \times 100 = 0.4\%$	$\frac{120}{3731} \times 100 = 3.5\%$					

D 口縁から一度外側へふくらみ、以下すぼまりながら底部へ移行するもの。(II D 106~119・

196, III D 156)

E 口縁から内湾しながら底部へ続くもの。(II E 120~125・197・198, III E 157~161

F 口縁が外反するもの(162)

1~74はAタイプの口縁である。施文方向は、口縁直下では横位、胸部では右下りのもの(1~62)、口縁下から右上りのもの(63~65)、口縁下より右下りのもの(66~69, 71~72)がみられる。又施文部位は、口縁より全面に施すものが大部分であるが、口縁下に無文帯をもつ(70~71, 73~74)ものや、施文後、意識的にヘラによってナデ消す資料も散見される(58)。なお、文様原体が小さいものは一般的に施文も丁寧であるが(3, 4, 9, 26, 59, 66)、粗大なものは施文も稚な傾向をもつ(1, 2, 7, 10)。

以下述べるのは、これらの資料中、特徴的なものについての概略である。

1は、1/3個体程が出土しており復元可能な資料である。それによると口径22.1cm、復元推定高25.5cmを計る。暗褐色を呈し、外壁には口縁直下より全面に荒い山形文を配する。施文は

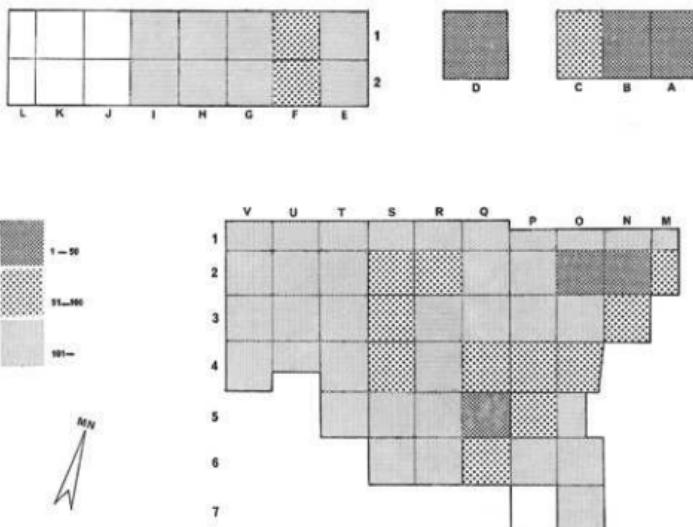


Fig. 11 I-1類(山形文)出土状況

口縁直下では横位、以下右下りの施文となる。内壁調整としては、ヘラヨコによる研磨を施す。内壁調整には、このようにヘラによるヨコナデによる例と、指頭による押圧調整、及び両者の併用例が観察される。本例と同一個体の底部は確認できないが、出土底部資料は全て平底でありこの土器も同様に平底になるものと思われる。以上のように、この資料は本遺跡出土押型土器の典型例である。

75～85はBタイプである。施文方向は、Aタイプと同じく口縁直下では横位、胴部では右下りとなる。又、施文は口縁下全面に施すが、口縁下に無文帯を持つものも(78)見られる。

75は1/3 傷体质出土している為に復元可能な資料である。口径24.6cm、復元推定高28.9cmで、上半部でゆるやかに胴が張り出し、以下すぼまりながら平底の底部へ移行する。暗褐色で胎土に砂粒、石英、雲母を含み、焼成は良好。

器壁は1.1cmを計る。79、80は同個一体と思われる。口径20cm、復元高は21cm程度であろう。施文原本は、長さ2.5cm、直径0.73cmで暗褐色。胎土に多めの砂粒と石英粒・雲母を含む。器壁は1cm前後、75と同じくこのタイプの典型例である。

86～105はCタイプに分類する。傾きがよく判らないものもあるが、口縁が直口し、胴部が直線的で、円筒形に近いのではないかと思われる資料(86、92)がある。

施文方向は、やはり前のタイプと同じく口縁下では横位で胴部では右下りのものが多いが、口縁下から右下りのもの(86、101)、逆に右上りの例(99、103)がみられる。又、施文部位

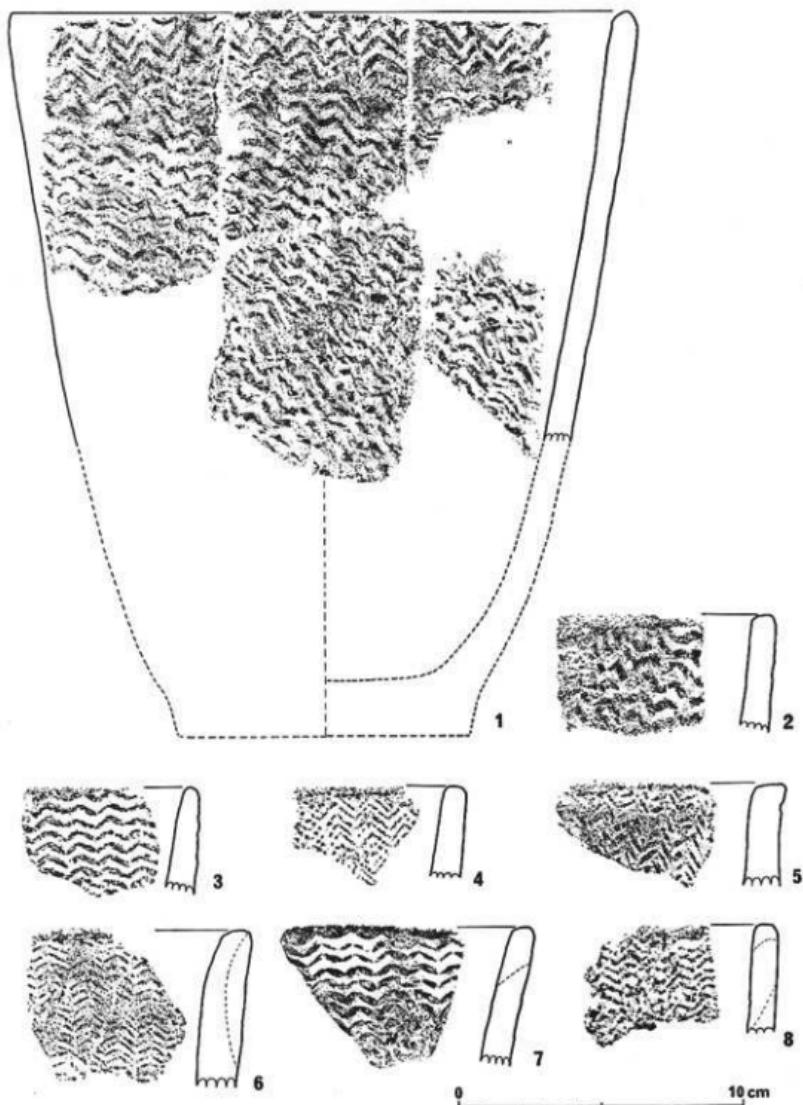


Fig. 12 I-1類(II A)土器尖測図①(1)

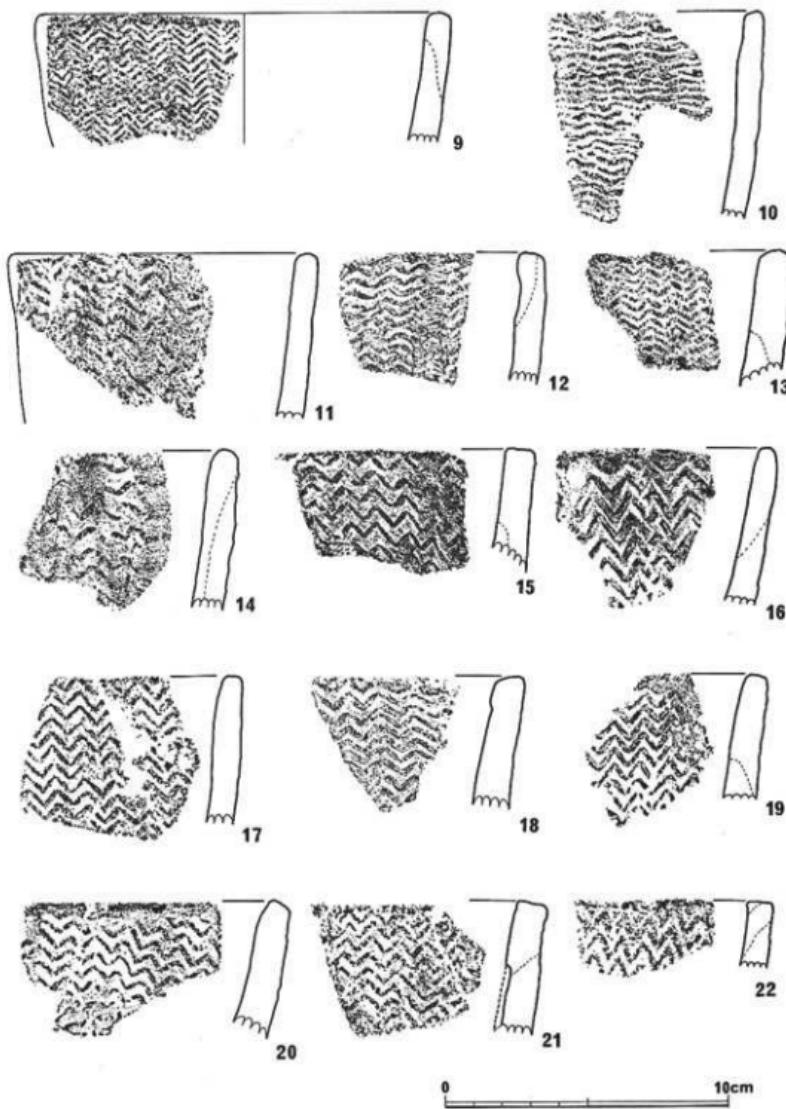


Fig. 13 I-1類 (II A) 土器尖測圖(+)

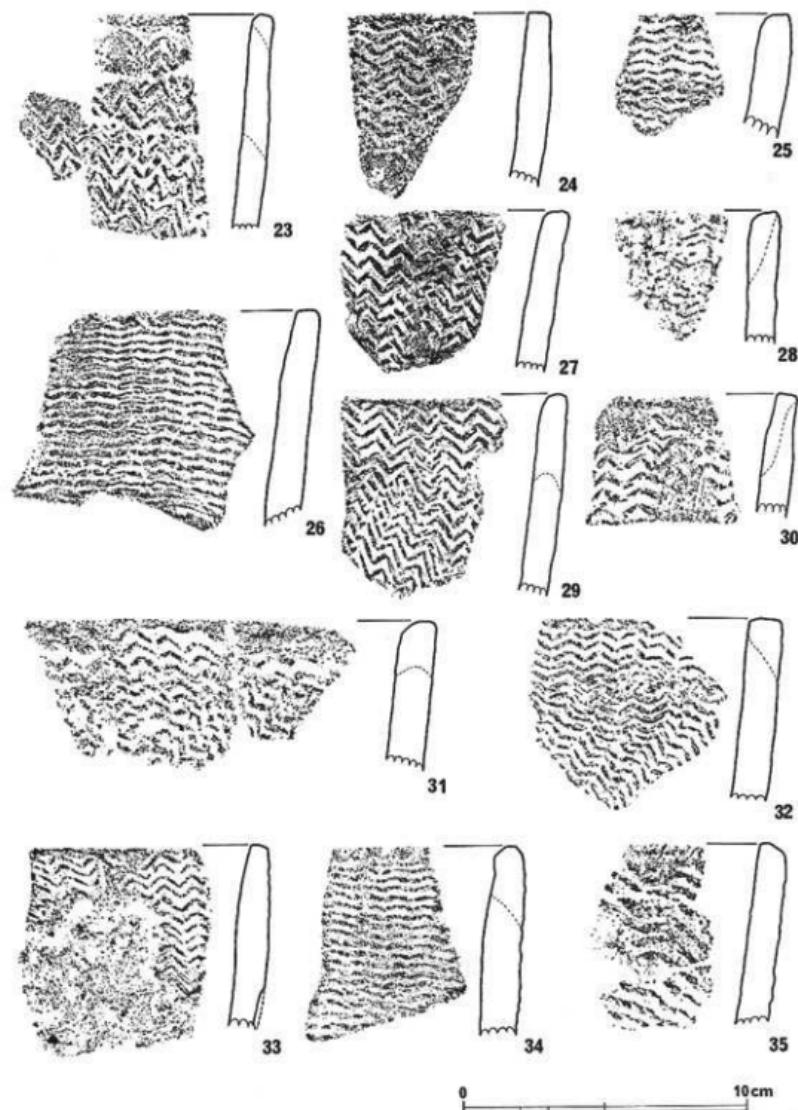


Fig. 14 I-1類 (II A) 土器尖測図⑧ (1)

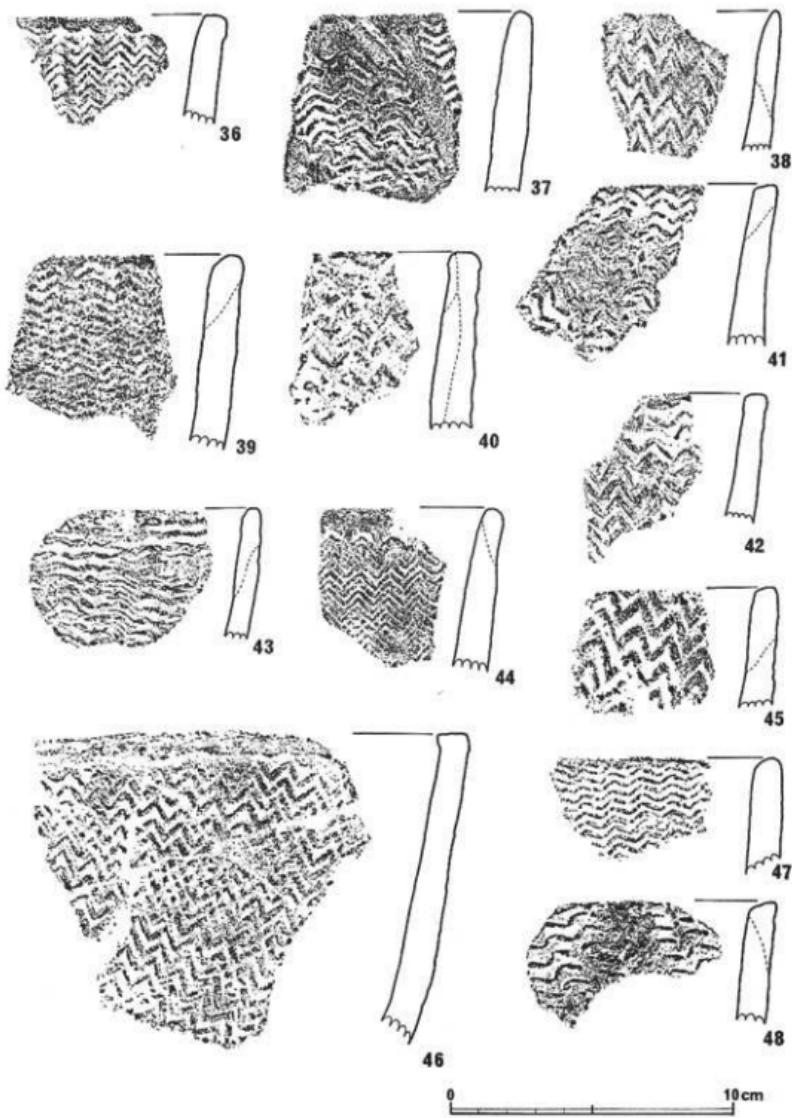


Fig. 15 I-1類(II A)土器実測図④(上)

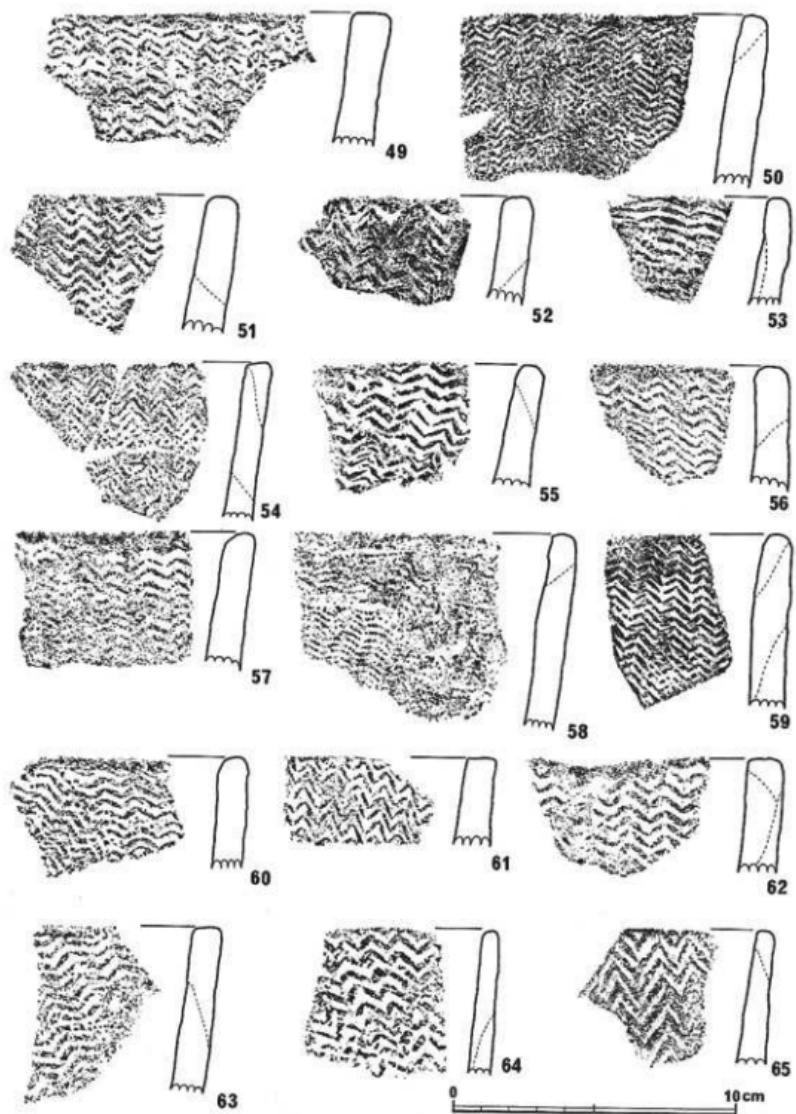


Fig. 16 I-1類(II A)土器実測図⑨(1)

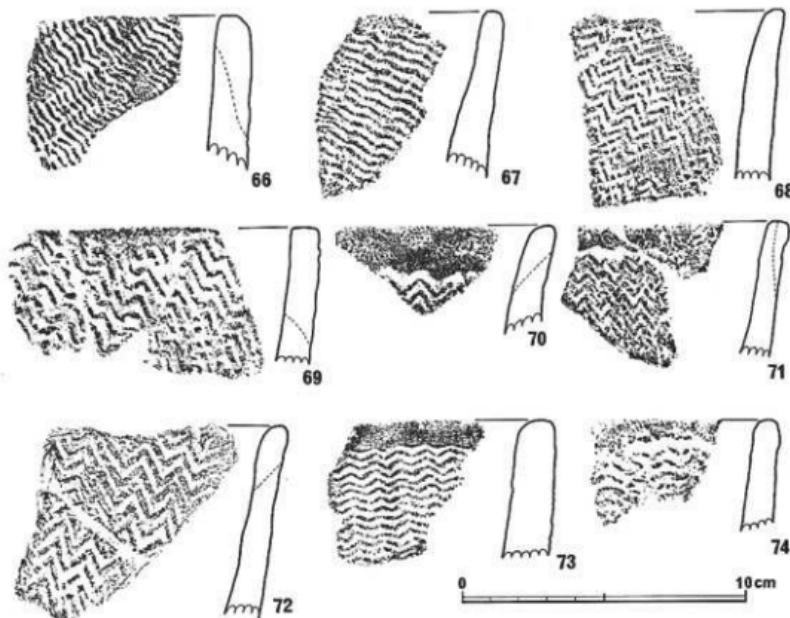


Fig. 17 I-1類 (II A) 土器尖端図⑥ (上)

も大部分が口縁下全面施文なのに對して幅広の無文帶を持つ資料がある (104, 105)。施文原体は、小さく施文も緻密なもの (95, 100, 102) と粗大で間のびしたるもの (86, 87) がみられる。

106~119・196はDタイプである。口縁下で一旦外側へ張り出し、しかしる後すばまりながら底部へ移行する。施文方向は口縁下横位のもの (107, 112, 114~118) と右下りのもの (106, 109~111・119) とに分かれる。

106は深鉢の大型破片で、茶褐色、胎土に砂粒・雲母を含む。焼成は良好で器壁は1.3cm前後、口唇部は平坦で内壁には指頭押圧調整痕が顕著である。111も深鉢の大型破片である。黄褐色を呈し胎土に砂粒・石英粒・雲母を含む。施文にあたっては直徑0.63cmの原体を右下り氣味に整然と施す。口唇は平坦、器壁は1.3cmを計り、106と共にこのタイプの典型である。196は大型の深鉢口縁である。口径33.8cmを計る。黄褐色を呈し、胎土には砂粒・石英粒・雲母を含む。焼成が甘い為か、器壁に剥落がみられる。

120~125, 197, 198はEタイプで、口縁から内湾しながら底部へ移行するのを特徴とする。施文方向は口縁下横位のもの (122, 125) と右下りのもの (120~122) そして右上りのもの (124) の3種が認められる。施文部位は口縁下全面施文のみで無文帶を持つものはない。

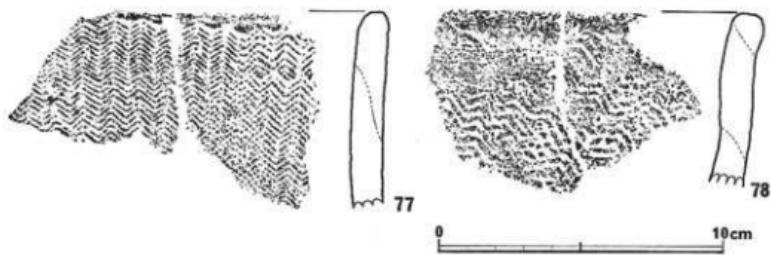
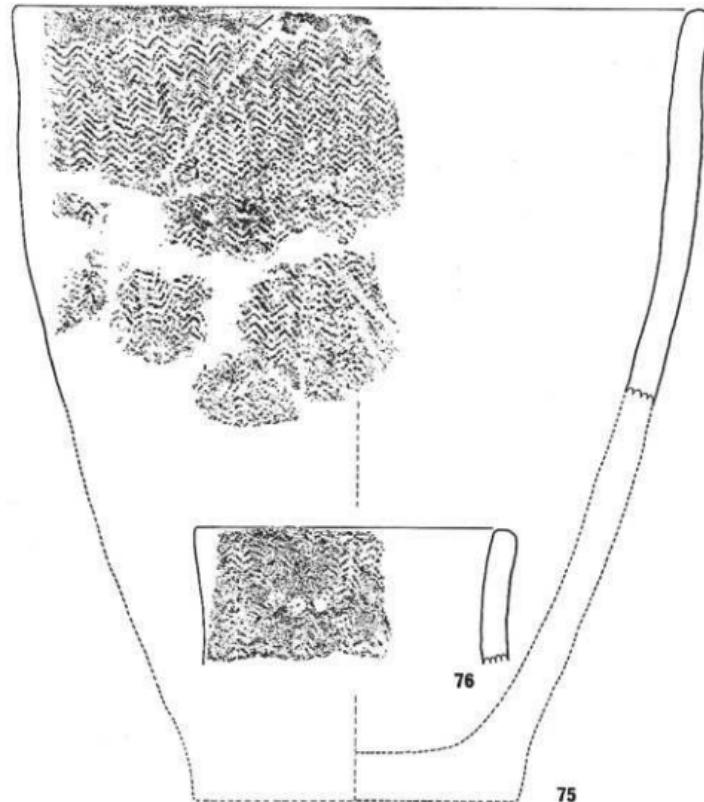


Fig. 18 1-1類(II B)土器尖端圖①(1)



Fig. 19 I-1類(II B)土器実測図②(上)

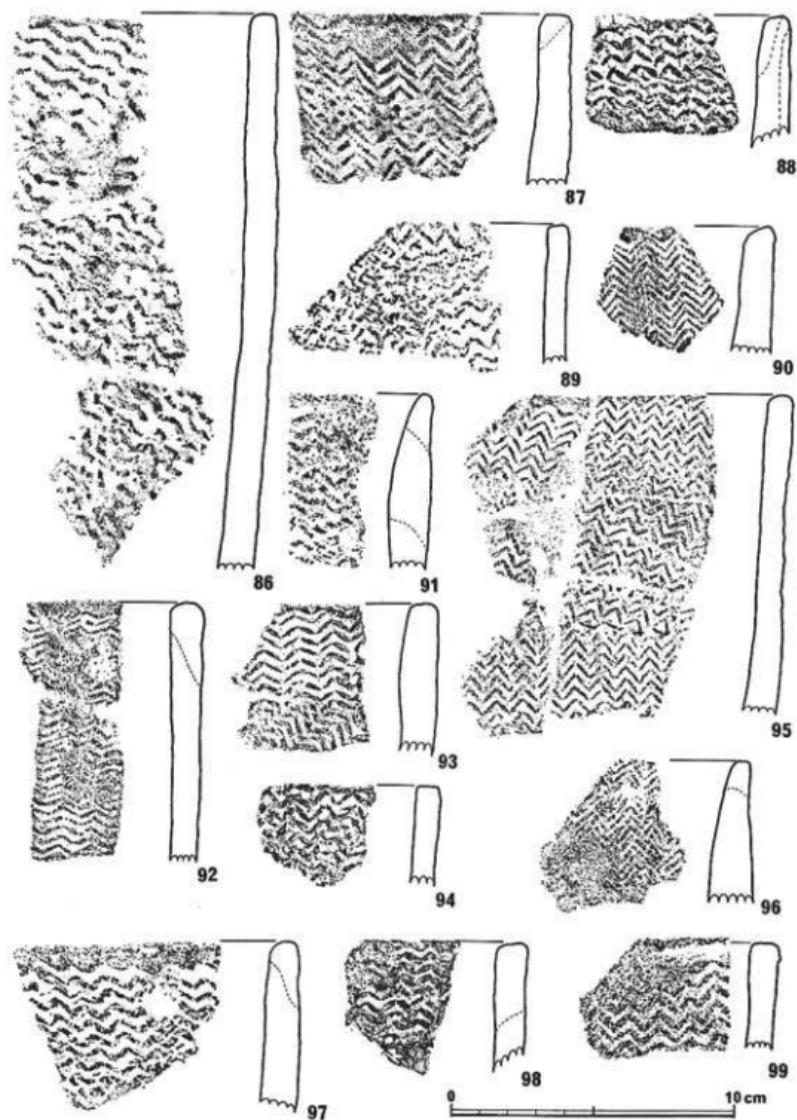


Fig. 20 I-1類 (II C) 土器実測図① (1)

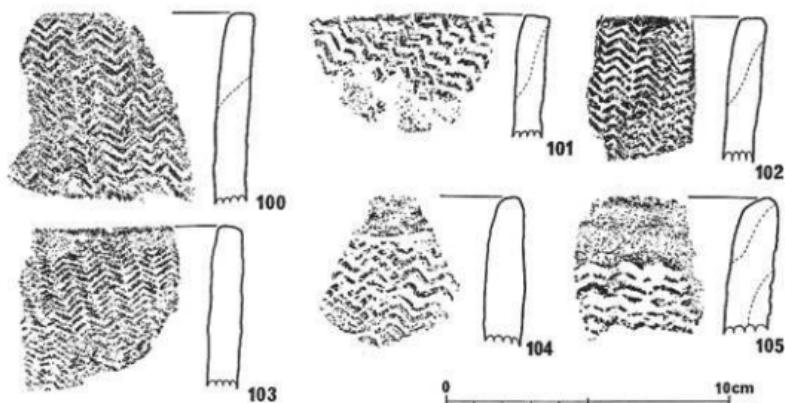


Fig. 21 I-1類 (II C) 土器実測図② (1)

120はこのタイプの代表例である。口径26cmが口縁下、砲弾形に内湾する。暗黄褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒・石英粒・雲母・長石を含む。施文原体は直径0.73cm、長さ3.5cm前後を計る。器壁は1.1cmでこの程度の大きさの深鉢として一般的である。197は特大の深鉢口縁である。口径41.2cmを計る。施文原体値は長さ2.5cm、直径0.66cmで右下りに施文する。なお、この資料は、120と同じくⅡ、Ⅲ層中の破片が接合した例である。198も大型深鉢口縁である。口径32cmを計る。施文原体値は長さ2.7cm、直径0.72cmで右下りに施文する。口唇部は平坦で、暗黄褐色を呈し、焼成は良好である。

以下125～162はⅢ層出土資料である。Ⅱ層出土のものと分けて掲載するのが妥当であるかどうか判らないが、一応その代表例のものを図示しておく。なお、分類はⅡ層出土のものに準じて行う。

126～149はAタイプである。施文は口縁下横位で脣部が右下りのもの（126～138、140）と口縁下より右下りのもの（139、141～146）の2種に分かれる。施文部位は、全面施文のものが大部分であるが、口縁下に無文帶をもつもの（136、138）もみられる。

126は口径18.5cmの深鉢大型破片である。暗褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母を含む。焼成は良好で、内壁には指頭による押圧調整痕がみられる。原体値は直径0.76cm、長さ2.5cmを計り施文は丁寧である。中型の大きさの深鉢の代表例である。129は口径10.7cm、小型深鉢口縁である。暗褐色で、胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良好で、外壁にはススが附着する。

150～155はCタイプである。施文は155を除いて全て横位である。又無文帶をもつものはない。153は暗褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母を含む。施文原体は直径0.63cmで横位施文を施す。

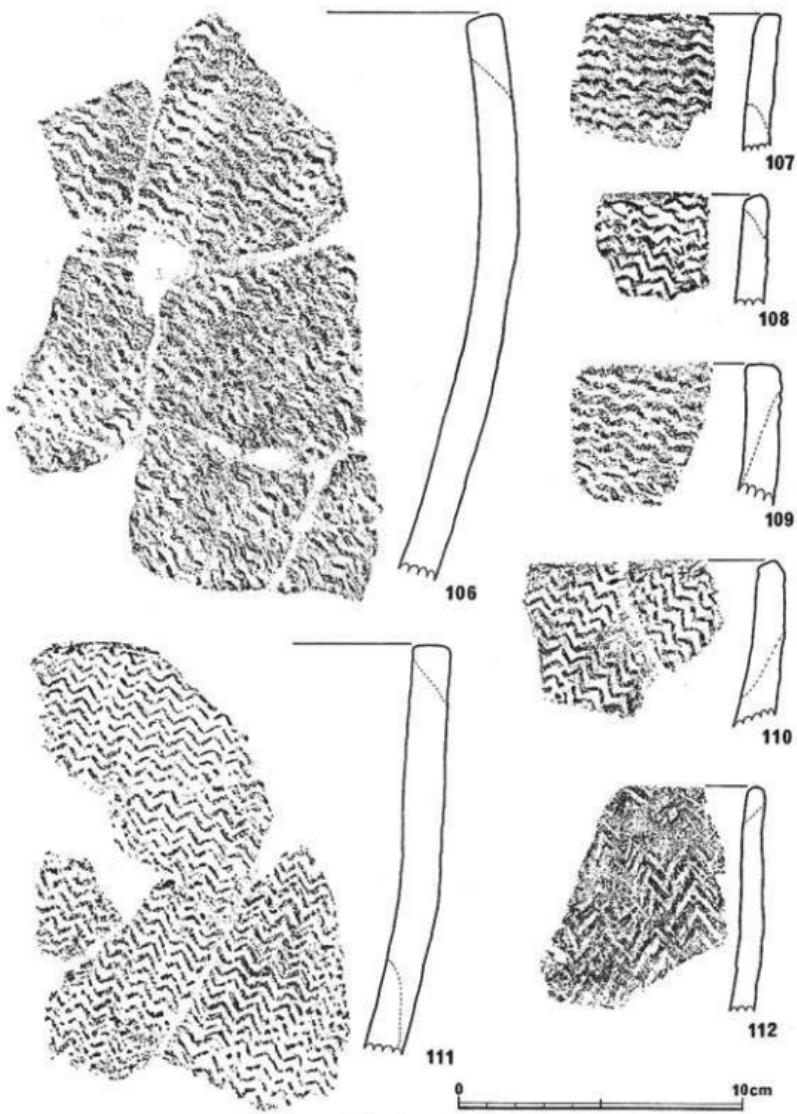


Fig. 22 I-1類 (II D) 土器尖削圖① (1/2)

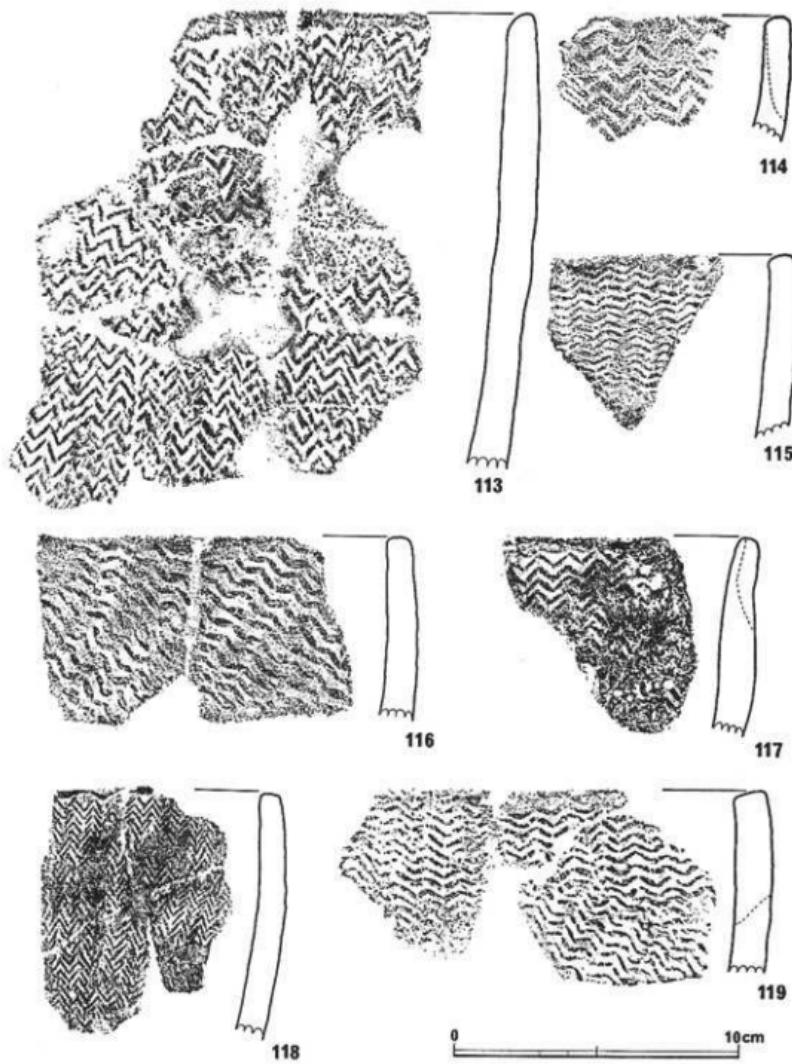


Fig. 23 I-1類 (II D) 土壠実測図② (1)

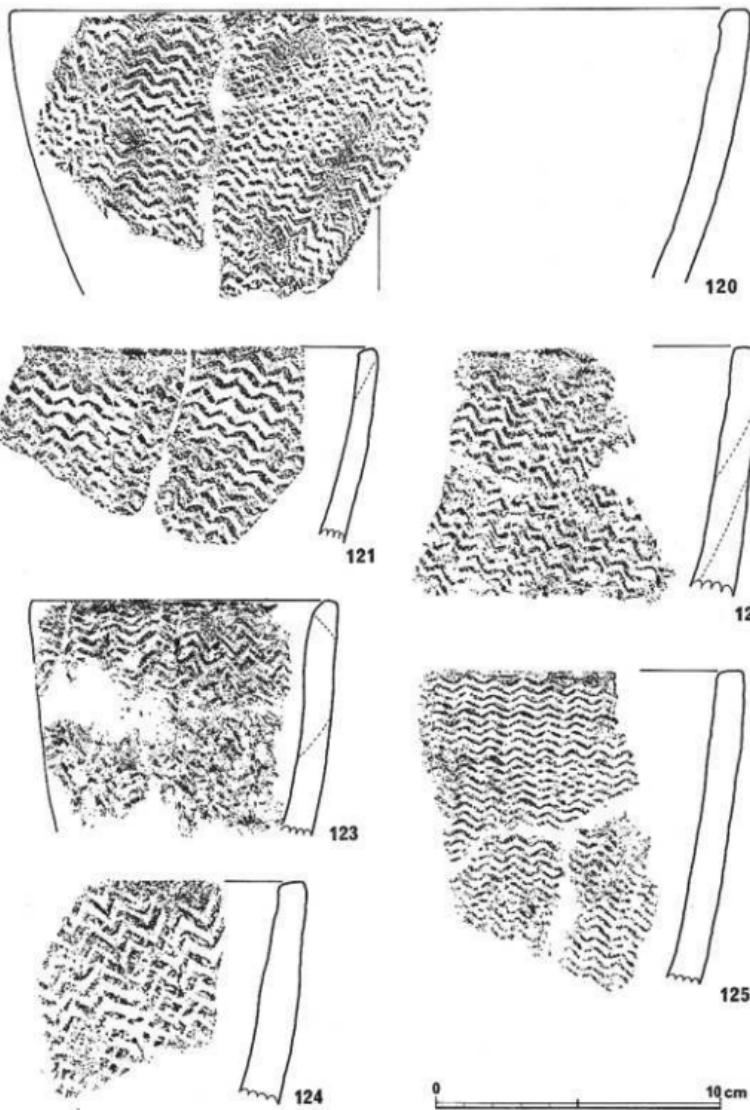


Fig. 24 I-1類(II E)土器実測図(1)

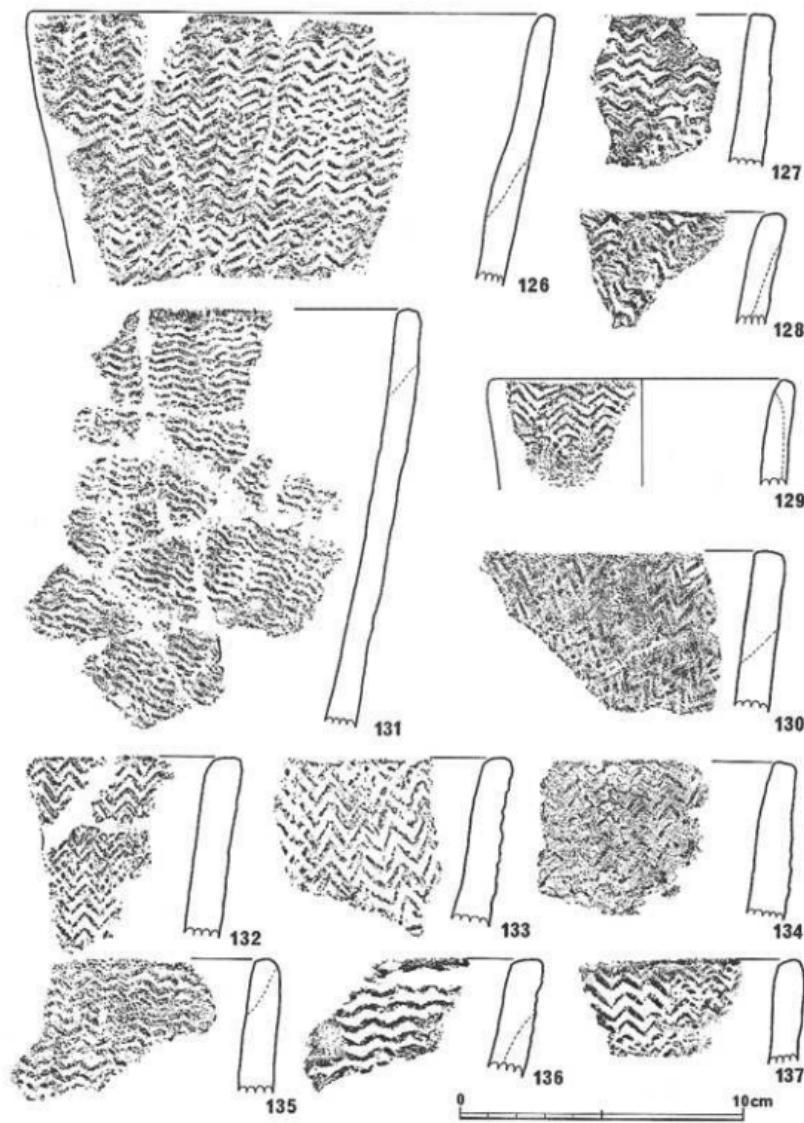


Fig. 25 I-1類(III A)土器実測図①(1)

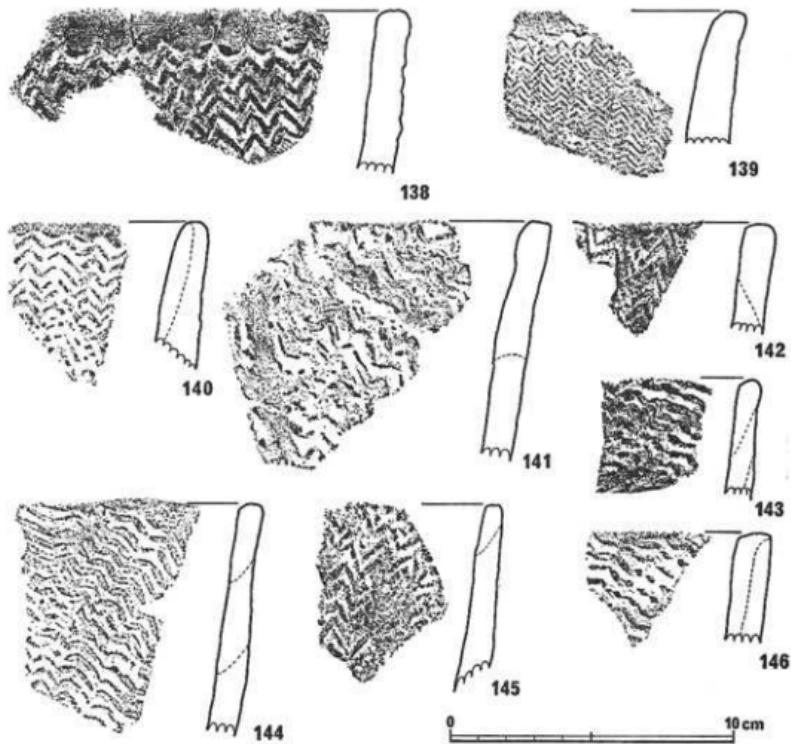


Fig. 26 I-1類(III A) 土器実測図②(上)

口縁より少し下った部分を幅広のへらで施文をナデ消しているが、丁度その部分が粘土の継ぎ目にあたることからの整形処置であろう。

156はDタイプ。口縁から僅かに副部が張り出す。口径17.5cm、茶褐色を呈する。胎土には砂粒・長石・雲母を含む。直徑0.73cmの原体で横位施文を行う。外壁には多量のススの附着を見る。

157~161はEタイプである。施文方向は口縁下横位で副部が右下りの例(157~159)及び口縁下より右下りの例(160~161)がある。159は口径20.2cm、中型の深鉢口縁である。暗褐色で胎土に砂粒・雲母を含む。原体直徑は0.76cm、長さ2.4cmを計る。内壁は口唇部附近で指頭による押圧調整を行う。

162は山形の深鉢口辺部でFタイプである。口縁が外反し、緻密な施文を内外壁共に施す。

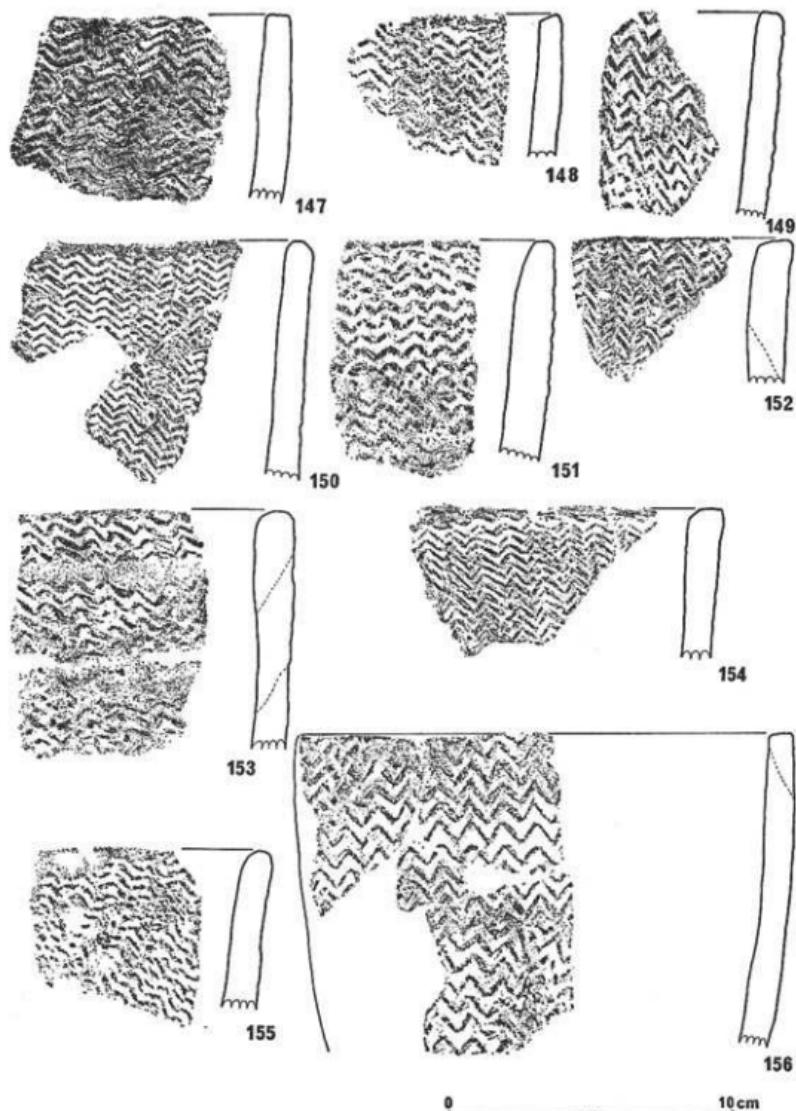


Fig. 27 I-1類 (III A + III C + III D) 土器実測図 (1)

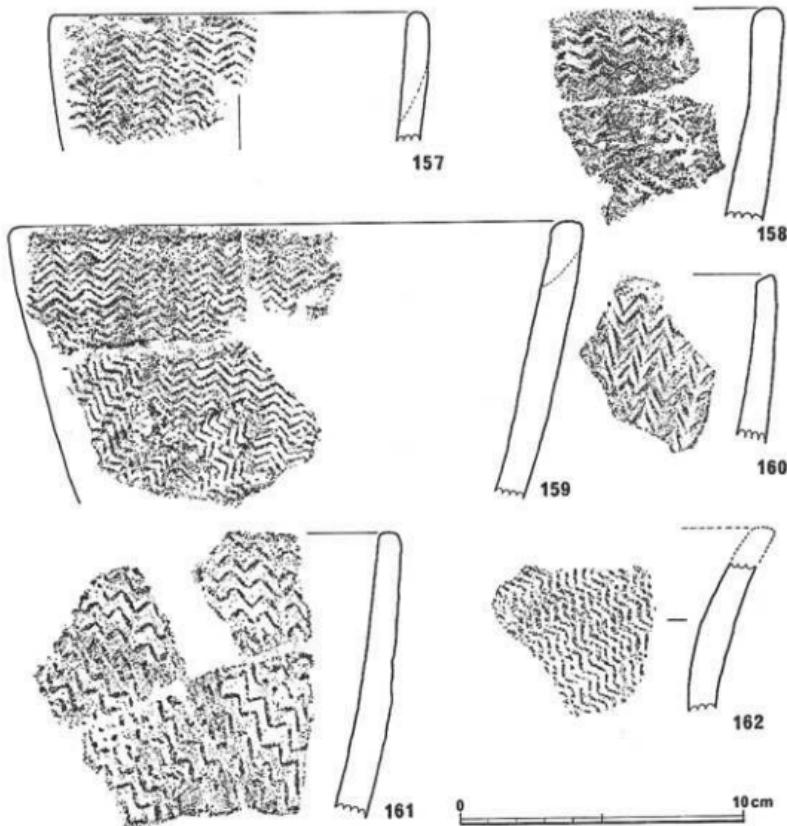


Fig. 28 I-1類(ⅢE・ⅢF)土器実測図(1)

その施文は、外壁は口縁下より全面縦位、内壁は口唇部附近のみ横位でそれぞれ原体は異なる。黄褐色で胎土に砂粒・雲母・長石を含む。内壁はよく研磨する。施文法、器形共に他と異なる唯一の例である。

162~221(196~198を除く)は、山形文の胸部及び底辺部である。口縁部と同じ基準で分類するが、傾きのはっきりしたものとそうでないものとがあり、その意味では口縁部ほど明瞭でない。

163~182はAタイプの資料と思われる。施文は横位のものもあるが、(163)、大部分は右下りのものである。施文原体の直徑が判るのは5例で、179、182がそれぞれ0.66cm、178、181が

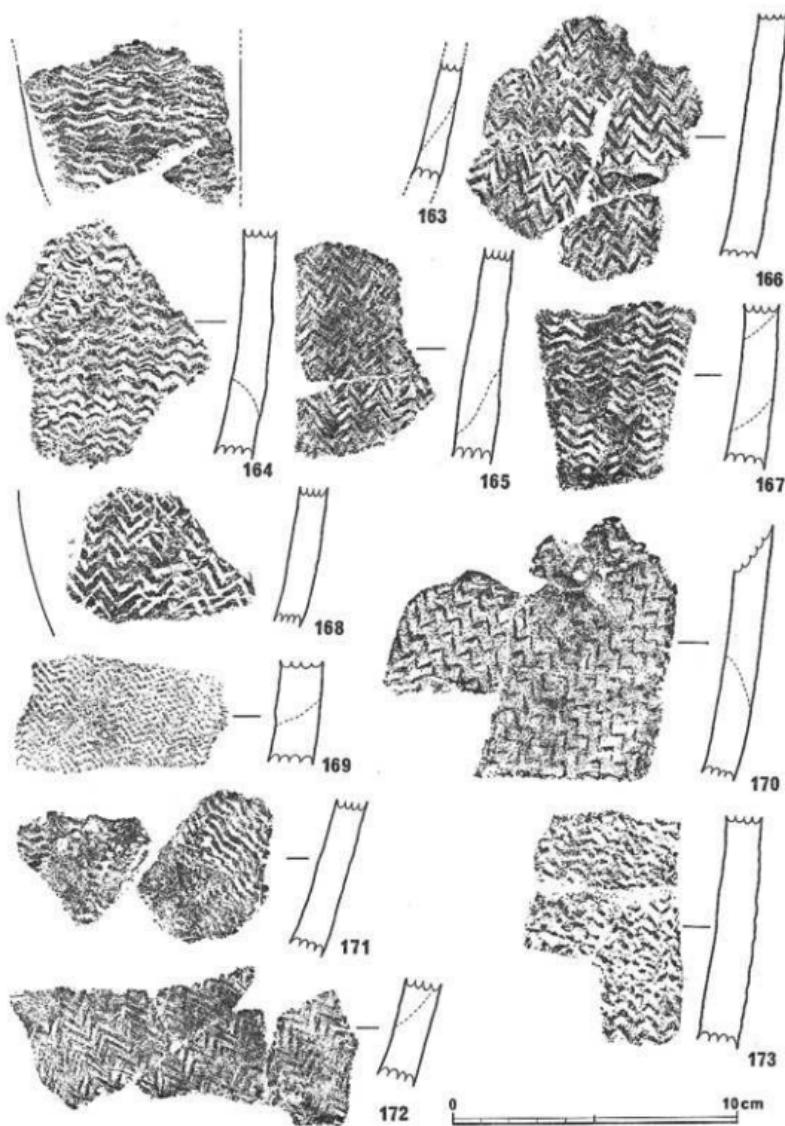


Fig. 29 I-1類(II A) 土器実測図①(1)

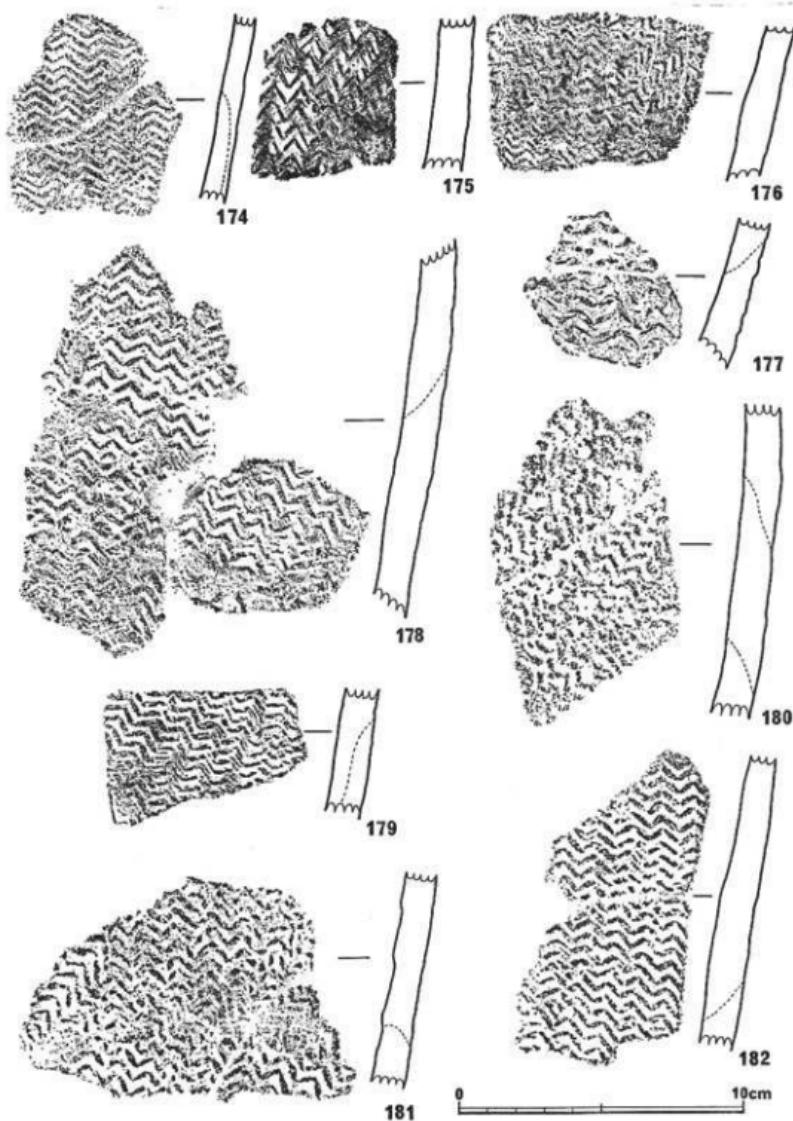


Fig. 30 I-1類 (II A) 土器実測図② (1)

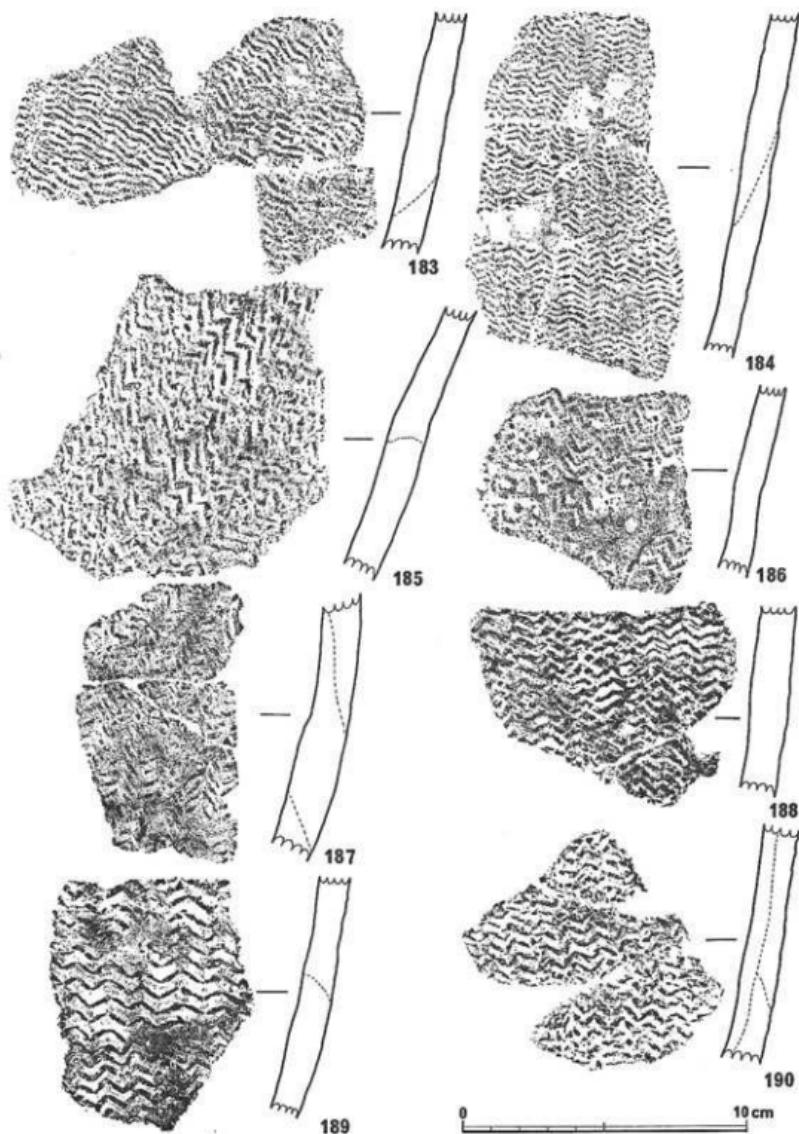


Fig. 31 I-1類(II B) 土器実測図(1)

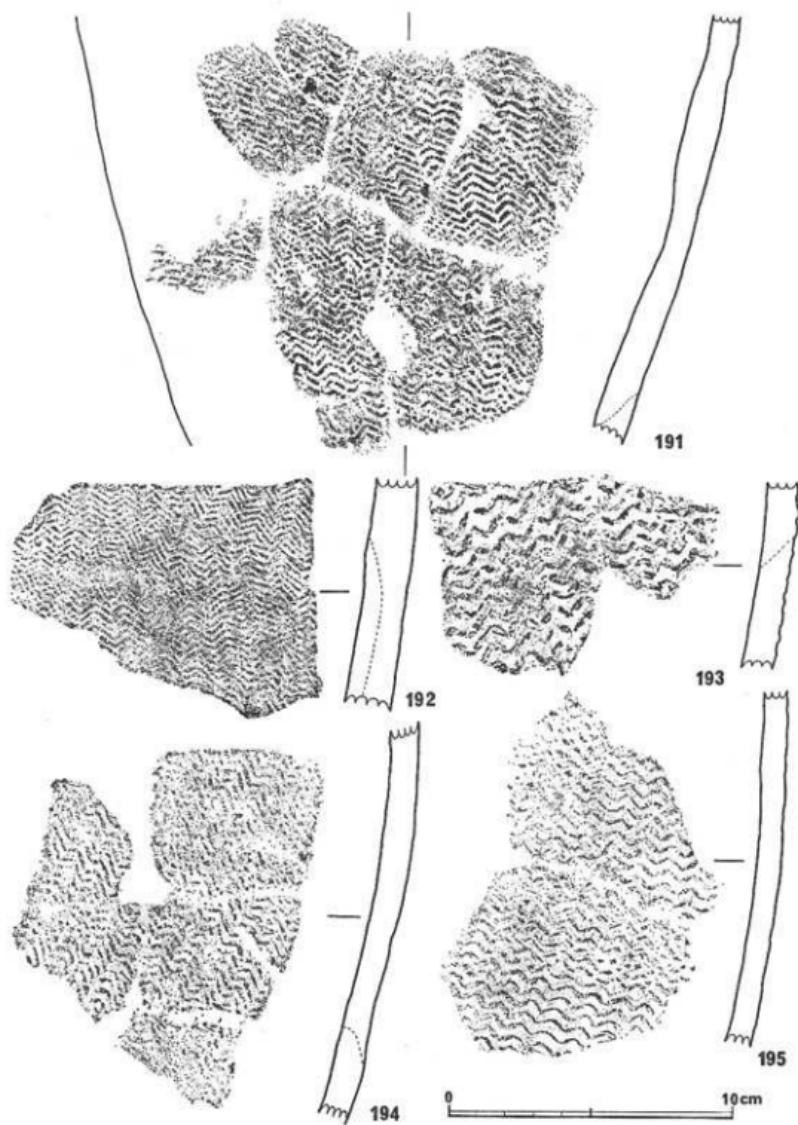


Fig. 32 I-1類(II D) 土器実測図(1)

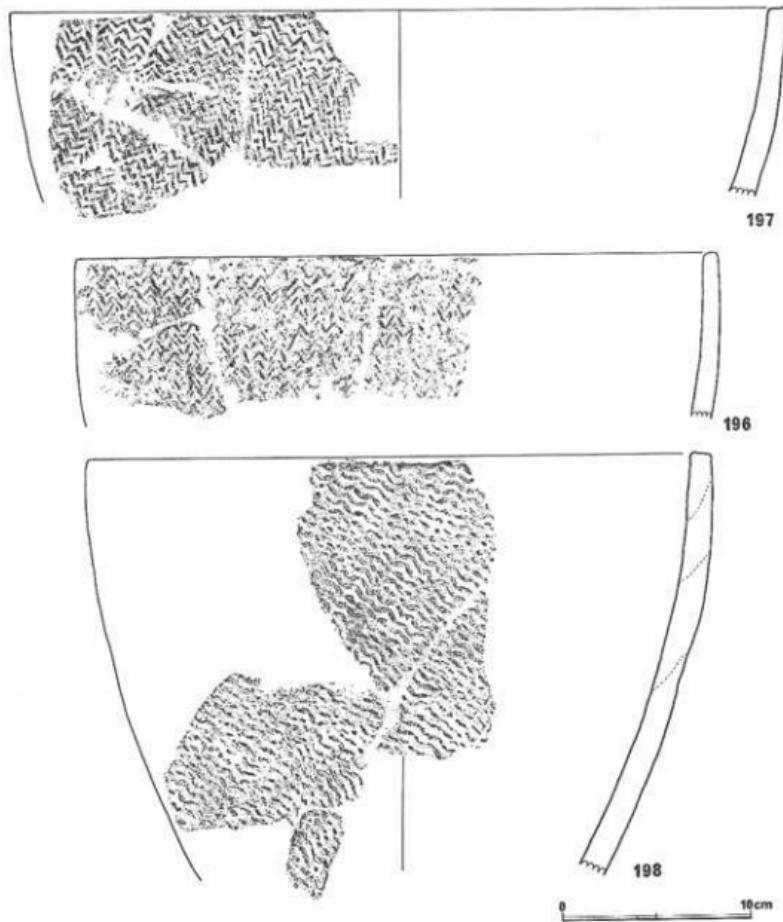


Fig. 33 I-1類 (II D + II E) 土壠実測図 (1/2)

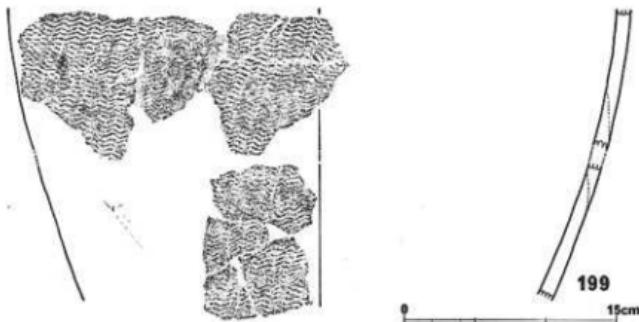


Fig. 34 I-1類 (II D) 土器実測図 (1)

0.73cm, 165が0.76cmである。なお165の胎土には黒曜石のチップが混入している。

183~190はBタイプの胴部である。184は茶褐色で焼成は良。胎土には砂粒・風化細礫・雲母を含む。なお、破片左側中程には施文に段差がみられる。この部分は丁度粘土の接合部分にも相当し、施文にあたって、器形全体が完成後に同時に施すばかりではなく、輪積みの各段階でも漸次施すことを示す資料である。このような例は熊本県中後迫遺跡でも指摘されている。

191~195, 199はDタイプとして分類する。191は大型の深鉢胴部である。破片上半の径で23.6cmを計る。黄褐色で胎土に砂粒・風化細礫・長石・雲母を含む。施文は右下り、外壁にはスグが附着する。器壁は1cm前後であるが、接合部は0.6cm程度しかない。内壁には指頭による押圧調整痕が顕著である。なお、施文原体値は直徑0.82cmである。

199は大型深鉢の口辺部である。上端径44cm, 推定口縁径は45cm程度と思われる。黄褐色で焼成は良好。胎土には砂粒の他雲母・長石を含む。施文原体は直徑0.76cmで、施文方向は横位である。なお、この資料はII, III層の破片が接合する例である。

200~212はII層出土の底辺部である。施文方向は横位のものと、右下りのもの、及び右上りのものとに分けられるが、1点のみ縦走するものが(210)みられる。施文原体が計測できるのは4点で、209が0.57cmと一番緻密で以下206が0.7cm, 207が0.73cm, そして202が0.85cmである。なお、207, 209の内壁にはスグが、又202の内壁にはコゲが附着している。

213~221はIII層出土の胴部及び底辺部片である。明確な分類は出来ない。

施文は横位が多く、右下りのものがこれに次ぐが、右上りのものも1点含まれる。(123)施文原体値を計測し得るのは4点で220が0.66cm, 221が0.7cm, 218が0.73cm, 215が0.76cmである。なお、この内218と220は緻密で施文も丁寧である。

222~253は山形文の底部である。何れも明瞭な平底で、尖底や丸底の資料はない。挿図作製時での都合上、順不同になっているが、底径の大小によって次の4種に分けておく。

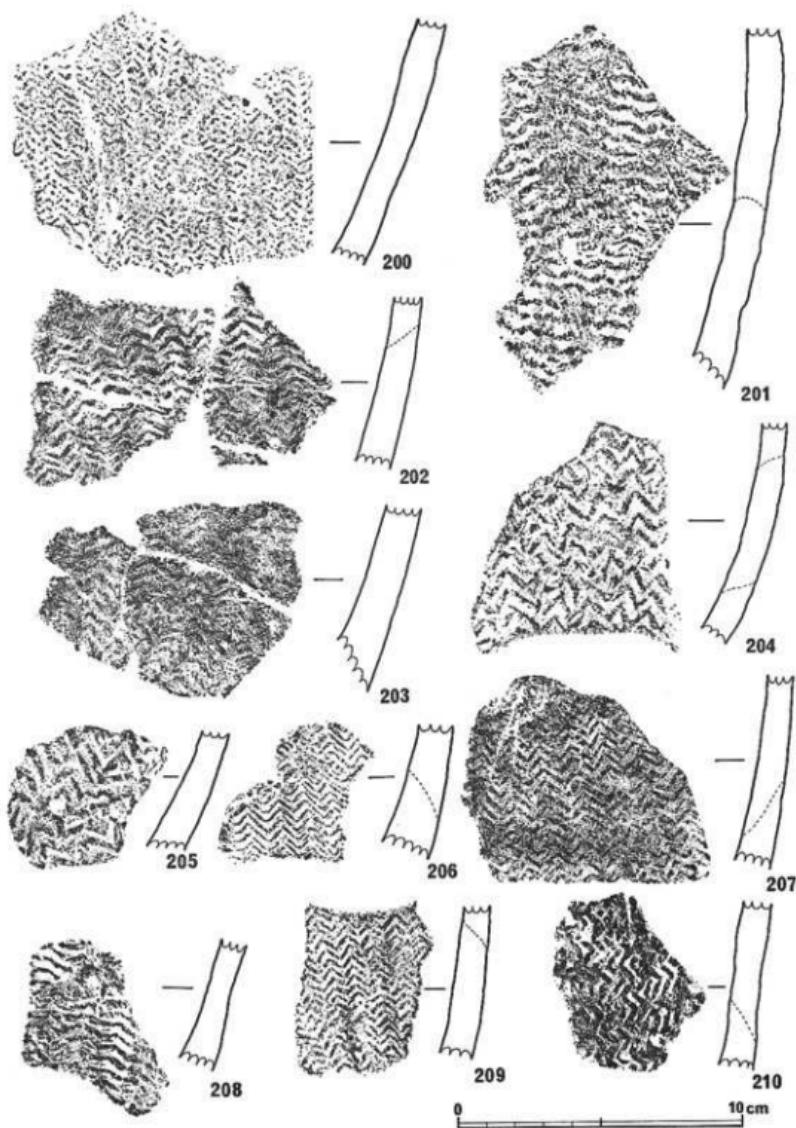


Fig. 35 I-1類底辺部実測図 (1/2)

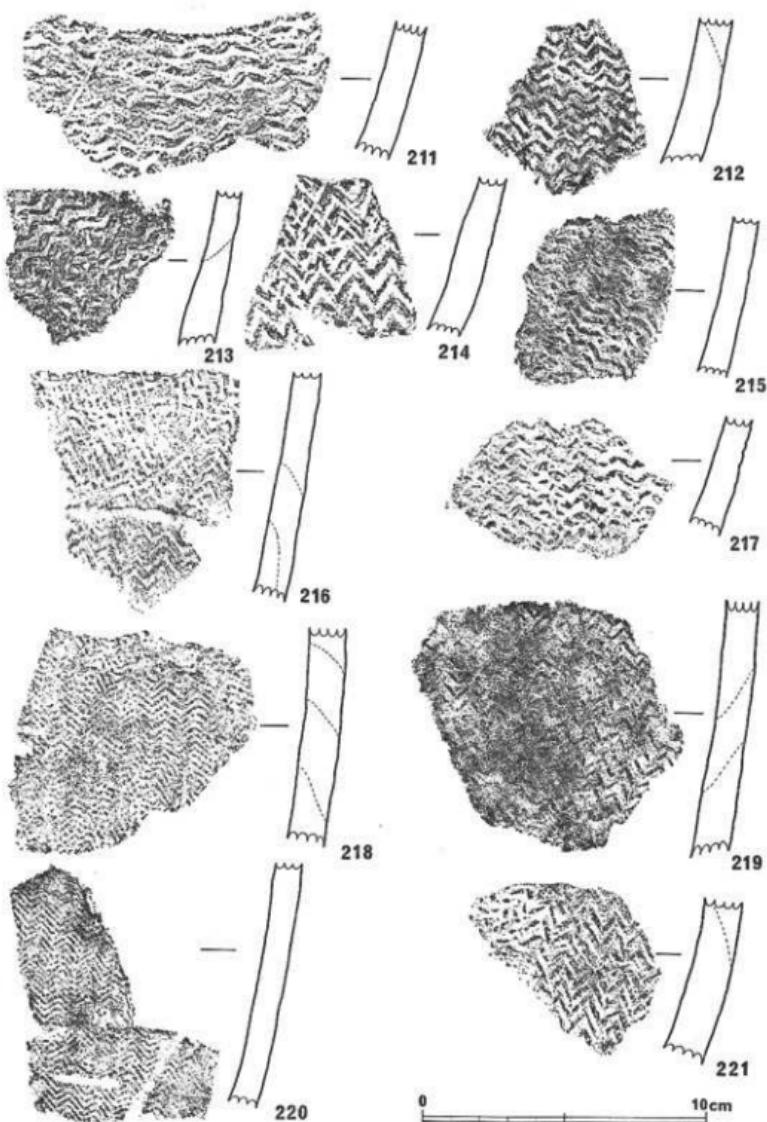


Fig. 36 I-1類底部分実測図 (1)

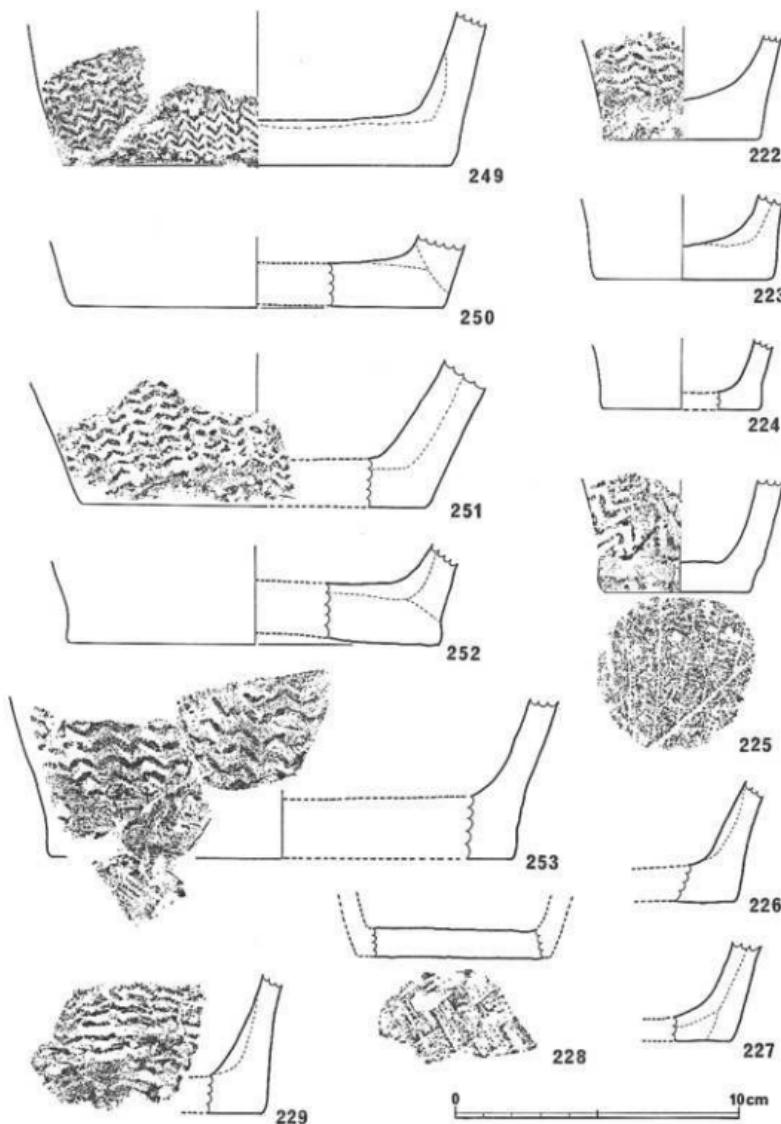


Fig. 37 I-1 類底部実測図① (1/2)

- a 5~7cm
- b 9~11cm
- c 12~14cm
- d 14cm~

222~229はaタイプに属する。底径は5.5~7cm程度で、これは口径8~12cmの小型のものと対応するものであろう。225は、一番小型で外壁0.9cm、底壁は1.1cm底径は5.5cmである。茶褐色で胎土には砂粒、石英粒を含む。焼成は良好である。施文原体は直径0.76cmで右下りに施文するが、底面に近い部分は施文後ヘラによる調整の為消される。底面には明瞭な木の葉の圧痕がみられる。228は底面のみで立ち上り部分は欠損している。器壁は1cmと薄い。内面には指頭による押圧痕がみられる。又、底面には、229と同じく3~4本を一単位とした櫛歯状の原体による、短い井桁状の擦痕が観察される。

230~239はbタイプである。235は茶褐色で胎土に多量の砂粒を含む。底径10.3cm、器壁は1.6cmを計り底面には無節の撚糸原体によるものと思われる押捺圧痕がみられる。

236は赤褐色で焼成は良好。胎土に砂粒・石英粒・雲母を含む。指頭による押圧調整を行うが、粘土の継ぎ目痕が明瞭である。底面には、235、238と同じく3~4本を一単位とした櫛歯状の原体による短い井桁状の擦痕が観察される。又、237、239の底面には木の葉の葉脈圧痕がみられる。

240~252はCタイプである。241は暗茶褐色で、胎土に多くの砂粒を含む。底面には間のびした山形文を施す。246は黄褐色を呈し、胎土に砂粒・長石・雲母を含む。焼成は良く、内壁にはコゲが附着する。底面には粘土接合面の為の方策と思われる太い沈線がみられるが、接合後の整形がうまくいかなかったものか、その部分より下面が剥落している。底面にみられる圧痕では、図示していないが、243には太い沈線があり、又、247では無節の撚糸原体による圧痕、そして248には、太い沈線の後、その上に施文した間のびした山形文などがみられる。なお、247と248の立ち上りは直角に近く、器形は円筒形になるのではないかと思われる。

253は一番大型タイプの深鉢底部である。底径16.2cm、暗黄色で、胎土には砂粒・石英粒・長石を含む。器壁は1.1cm、底壁は2cmを計り内壁には多量のコゲが附着する。なお底面には、235、236、238と同様の擦痕がみられる。